

## SONYは、戦後の日本に花開いた

### スタートアップ企業だった②

「井深なしにはソニーは生まれず、  
盛田なしにはソニーは残らなかつた」

本誌主幹 大中西一

#### トランジスタ開発に 社運を賭ける

1950年に、井深氏が代表取締役社長に就任。SONYの伝説となった日本初のテープレコーダー「テープレコーダー(Tape recorder)」を開発した井深大氏と盛田昭夫氏のお2人は、いよいよ起業家から企業人となります。

1952年3月、井深氏は3カ月間の海外視察調査のため渡米。日本市場では、テープレコーダーの売れ先が学校を中心にした教育関係に集中していましたが、それ以外にマーケットがあるのではないかと、米国ではどうテープレコーダーを使っているのか、さら

にできることなら米国における製造過程も学んできたいという趣旨での渡米でした。ニューヨークに到着した井深

氏を訪ねてきた米国人の知り合いが、「ウエスタン・エレクトロニクス(WEE)という企業がトランジスタの特許を公開しても良いと言っているが興味はないか」という話を持ち込みました。

当時、SONYの前身である「東京通信工業」は、テープレコーダーに使うテープを増産するためにいろいろな分野から人を集めており、これらの人たちが有効に活躍できる仕事はないものかという気持ちは井深氏にも盛田氏にもあったようで、そもそもは渡米の目的には全然入っていなかった話であり、さらにまだまだ黎明期の「東京通

信工業」にとつて、2万5000ドル(約900万円)という特許料も大きいすぎるものではありませんが、新たな仲間たちとともにトランジスタの開発に着手することとなりました。

こうして、会社設立からわずか6年、資本金も1億円に満たない小さな会社は、まだまだ未知数の多いトランジスタの開発を、当時の会社規模としては、思いも及ばないほどのお金と人手をかけてスタートしました。当時の通商産業省に事業の認可を受けるために井深氏が行った説明が残っています。

「物が動くことを動作すると言う。動くということには摩擦が付きもの。摩擦が起ると物質は減る。この減るということが、故障の原因になる。トランジスタは、物が動いて動作するのではない。分子が変わることによって真空管と同じ働きをするものだ。そのため、トランジスタには故障がない。真空管に比べて教段も小さく、構造が簡単な上、頑丈である。しかるに、真空管とは全然別のものである」  
こうしてトランジスタの開発は、ス

タートしました。

#### 「ソニー株式会社」誕生

1955年「東京通信工業」はついにトランジスタラジオの開発に成功し、世界に打って出ます。当時日本製品の多くが今日いう「OEM」として自社名を冠することなく、米国企業のブランド名で販売され、裏を見ると「Made In Japan」となっていました。あくまでも自社ブランドとして販売したいと考えた井深氏と盛田氏は、世界に通用するブランド名が必要と考え、「SONY」というブランドとロゴをスタートさせます。

「SOUND」や「SONIC」の語源となったラテン語の「SONUS(ソヌス)」と、小さいとか坊やという意味の「SONNY」をかけたネーミングで、井深氏が米国では「イビユー



日本最初のトランジスタラジオ

カ」と呼ばれてしまうような経験もあり、世界中で通用するブランド名が欲しかったのだと聞いています。

1957年には、東京・数寄屋橋の角地（現在ソニービルが建っている場所）が借りられることとなり、12月19日午後5時1分に、井深氏がスイッチを入れ、夜空に『SONY』のネオンが輝きました。関係者全員が毛布にくるまってネオンに明かりが灯されるのを待っていたほどの寒い日でした。大きさは、9・75×10・90m。総重量2250kg。SONYの各1文字が262・5kgもあるという大規模なもので、老朽化したビルの補強と借り賃で約2000万円の費用を要しましたが、『SONY』のブランドを世界に知らしめる効果は絶大でした。

その年の大晦日、「行く年、来る年」というNHKの番組中で、東京の夜景



数寄屋橋ソニービル

としてテレビ電波に乗って、SONYの大ネオンが日本中に映し出されたのです。井深氏は、「これで、元が取れた」と大喜びしたそうです。

良いことの多かった1957年でしたが、好事魔多し、この年、「東京通信工業」のニューヨーク事務所代表者であった山田志道氏が狭心症で亡くなりました。10月に、弔問と今後の打ち合わせを兼ねてニューヨークを訪れた盛田氏が見たのは、あのトランジスタラジオが、堂々と『SONY』のロゴを付け、一流とされる販売店の店頭に置かれている図でした。

こうして世界的に定着した『SONY』のロゴと名称は、翌1958年初頭に「東京通信工業」の新しい社名として決定されます。

こうして「ソニー株式会社」が誕生したのです。

### 経団連会長目前での急逝

その後の『SONY』の成功と発展は、本誌の読者の皆さんにはよくご存じの通りです。ソニーを最初に有名にしたトランジスタラジオに始まり、カセットテープレコーダー、そしてトリニトロンという画像が美しいブラウン

管など、すべて井深氏が中心となって開発したものです。さらに『SONY』の名を世界中に広めることになった携帯音楽再生装置「ウォークマン」、取付可搬型テープレコーダーとして名を馳せた「デンスケ」、カセット式VTRの「ベータマックス」など、現在でもプロ用機器をはじめ多くの場面でも『SONY』のロゴを目にすることができ、それはご承知の通り世界の若者の憧れの的となったのです。

さらに井深氏、盛田氏の偉業は、アップル社の創始者であるスティーブ・ジョブズにも大きな影響を与えたといわれ、Macの工場を作るときに『SONY』の工場を模倣したとさえ言われています。

Stay hungry, stay foolish. このジョブズ氏の名言にも、お2人の精神が息づいていると私は感じております。

最後に、「ソニースピリット」とは何かをお話ししたいと思います。

『SONY』の前身である「東京通信工業」の「設立趣意書」と並んで必ず出てくるのが「ソニースピリット」というフレーズですが、何回聞いても両氏はあえてこれを言葉として説明し

ようとはしませんでした。

「みなが楽しく働いて、おもしろい製品ができあがって、お客さんに喜んでもらえたらいいじゃないか」

そんなお2人のお気持ちがきっと「ソニースピリット」だったのではないのでしょうか。

お2人の役割分担は、会社創立当時から盛田氏が資金繰りを担当し、井深氏はさまざまな画期的発明に没頭するというもので、ウォークマンも、最初のアイデアは井深氏でしたが、開発の指揮は当時代表取締役社長を務めていた盛田氏が、若手社員とともに行ったそうです。

井深氏がいなければ、『SONY』は生まれませんでした。盛田氏がいなければ『SONY』は残っていなかったのではないのでしょうか。

盛田氏とは「三極委員会」で何回もご一緒しました。いよいよ経団連の会長になられることになった矢先に、前会長に挨拶に行く日の朝亡くなられたことは、返す返すも無念に思います。

エンターテインメント事業にまで広がる現在の『SONY』の姿を見ると、もしあのまま盛田氏が経団連を率いてくれていたらと思います。